

20240609 聖霊降臨節第4主日・全体礼拝(「こどもの教会」方式による)

司式:山本 典子

奏楽:橋本恵美子

前奏:「ただ汝にのみ、主イエス・キリストよ」(J.パッヘルベル)

招詞:神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。(1テモ 3:15b)

讃美歌:こどもさんびか4(『21』6「つくりぬしを賛美します」)

交読詩編 16:7-11

07 わたしは主をたたえます。主はわたしの思いを励まし/わたしの心を夜ごと諭してくださいます。

08 わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし/わたしは揺らぐことはありません。

09 わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います。

10 あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく/あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず

11 命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い/右の御手から永遠の喜びをいただきます。

朗読聖書:マタイによる福音書 19:13-15

◆子供を祝福する

13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。

14 しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」

15 そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。」

### 祈禱

聖なる父なる神さま、聖名を賛美致します。そして御国を切に待ち望みます。

私たちは先週6月2日、教会学校の礼拝と主日礼拝を、創立100周年記念礼拝として献げ、喜びの祝会のひと時も持つことが出来ました。100年間の神さまの見守りと恵み豊かな記念の一日を心から感謝致します。

そして、新しい希望に押し出され一週間歩んできましたが、その日々の中ではイエスさまが繋いでくださった手を離してしまったときがあったかも知れません。神さま、悔いる私たちを、またこの礼拝堂に集めてくださり、今日は子供も大人も共に礼拝を献げられるように備えてくださった神さまの大きな愛に深く感謝致します。そして、この礼拝は、子どもの日・花の日を覚えて献げています。どうぞ、世界の子供たち、特に戦争に巻き込まれて苦しんでいる子供たち、飢えの中で命の危機に曝されている子供たち、孤独の悲しみの中に居る子供たちに、神さまの救いの御手が届きますように。そのために、私たちが何か小さな事でもできますように励ましてください。

日本では能登半島の地震の爪痕がまだ生々しいことを私たちは知っています。そして13年を経ても東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故によってもたらされた自然と命と心の傷つきは癒えないところが未だ沢山あります。どうか少しでも希望の光の方へ進みますように切に祈ります。

神さま、体や心に弱さを抱えていらっしゃる教会の方、お一人お一人を私たちは心配しています。神さまが、どうぞ傍にいて支えてくださいますように。

これから鮎川先生、佃先生の説教を聴けますことを、神さま、先生方へ感謝致します。私たちが素直な心で御言葉を受け取ることが出来ますように。そして先生方が聖霊を豊かに受けて語ってくださいますように祈ります。

今日、日本の各地、世界の各地で献げられている礼拝と共に、この礼拝が神さまを存分に賛美するものになりますように。

このお祈りを尊き主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げいたします。アーメン。

讃美歌:こどもさんびか58(『21』60「どんなにちいさなこりでも」)

### こどもへの説教「祝される人」

鮎川健一

皆さん、お早うございます。今日は、子どもたちと一緒に、このように礼拝を守って嬉しく思います。——子供たちに聴きますけれど——、変なことを聞きますが、今朝、皆さんが今ここにいるということはどういうことでしょうか。自分で来たいと思ったから来たのか、それとも幼稚園の先生、学校の先生、またおうちの人から“行きなさい”と言われたから来ているのか、どうでしょうか。

私は皆さんと同じくらいの時に、高校生までと言っていいと思いますが、教会に一度も行ったことがありません。日曜日、教会の前を通ることはあるのですが、プールに行くことが頭に一杯で、“いつかは行こう”などは全く思わない。また土曜日に買い物に行く時があり、それは別の教会の前を通るのですが、そこからいろいろな歌が、話が聴こえてくるのですが、“明日、この教会に行ってみよう”とは思わない、マクドナルドに行くことで頭に一杯、ご飯を食べること、買い物をする頭に一杯で、教会の「キ」の字もまったく考えてない、それで高校生まで行ってしまいました。高校生の時は学校の宿題で“(教会に)行きなさい”と言われ、そこから行き始めたということですが、皆さんはどうでしょうか。

今日の聖書の所を見ると、こう書いてあります。「イエスさまから手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た」。これは偉い先生がいると、その先生に願うのです。子供の頭に手を置いていただいて子供の祝福を祈ってもらったためでした。親御さんたちは、子供たちが、“健やかに、元気にこれからも遅く生きてほしい”という願いを持ってイエスさまのところへ連れて来たのでしょうか。そこで、不思議なことが起きました。イエスさまの弟子たちです。

この親御さんたちは、イエスさまは偉い人だと思っていたかもしれないが、救い主であると信じていたかどうかは分かりません。そのことからかも知れませんが、子どもたちを連れて来たことに、弟子たちはいろいろ言ったのです。“こっちに来るな”、子どもは“あっちに行っていなさい、来てはいけない”と。そのようなことがよく家庭の中でも地域の中でもありました。だから子供には自由がない、やりたいことがなかなかできない、大人たちに交じって何かをするということは、せいぜいお祭りの時くらいでしょうか。さて、このお弟子さんたちはどうしてこうしたのでしょうか。

お弟子さんたちは、イエスさまに面倒をかけさせたくなかったのでしょうか。しかしそれは神さまの思いとは違っていました。イエスさまは喜んで子供たちを迎えました。そして祝福されました。イエスさまは言われました。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げはならない。天の国は

このような者たちのものである。」と。「このような者たち」とは何でしょうか。これは「祝福された子供たち」のことです。このお話しの前にも同じようなことがありました。それは「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない(マタ 18:3)」、「子供のようになる」とか、「子供のような者」とはどういう人を言うのでしょうか。「子供になれ」と言っているのではない、「大人が子供になれ」と言っているのではないのです。

聖書で伝える「子供のような」とは、それは、この当時、「何も出来ない、役に立たない、力がない、誰かに頼らなければ生きていけない」ということから、イエスさまは、「天の国は目の前にいる、このような弱く小さな者たちのものだ」と言われたのです。「天国とはそういう者たちのものです、偉そうに威張ったり、力づくで何かをしたり、人を胡麻化したり、虐めたり、そういう人たちのものではありません」ということです。また子供たちは何も持っていない、誰かから与えられなければ何も持つことが出来ない、そういう子供たちは親御さんたちや大人たちに守られて、イエスさまの所に連れて来られた、一緒に来た。それで子供たちはイエスさまから祝福を受けて、天の国に入ることができるようになりました。それが嬉しいことがどうか子供たちにとっては分かりません。親御さんたちの思いです。しかしイエスさまは、この力のない子供たちを見て、これこそ「神の国にふさわしく、救われるのにふさわしい」と、こう言われたのです。

私たちは、今、こうして神さまから呼び集められて、教会にきています。難しい言葉で言うと、「神さまと一緒に生きる永遠の命に生きる者とされた」ということです。そこで教会にきていて、教会にきてることによって「永遠の命」というものが与えられている、「神さまと一緒に生きる」という心が与えられるということでしょう。私たちには毎日は色々なことがあります。ニュースを見ても、外に一歩出ただけでもいろんなことがあります。それでも神さまイエスさまは、私たち、天の国に生きるように、いろんなことを赦してくださっています。そして、この神さまからの大きな恵みを大切に私たちが生きていく、その思いが、心が与えられるのです。神さまが共にいてくださって、いつも助けてくださる、そういったことを思いながら、私たちは今、あるわけですが、ここにいる皆さん一人ひとりが、子供たち一人ひとりが、こういった思いを持ちながら生きていけるように、生活していけるように私も願っています。

お祈りをしましょう。

天の父なる御神さま、この日を迎えられ感謝致します。6月になり、雨の季節になりました。世界や日本では毎日大変なことがあります。どうか、神さま、この世界が神さまの思いで溢れますように。弱く小さな者が神さまに祝福されて、力強く生きることが出来ますように。私たちも神さまの思いに適った生活ができますようにお祈りください。

ここに来られなかったお友だちの上にも神さまが共に居てください、この一日に、これからの時、力を与えてくださいますように、祝福して下さいますように。

このお祈りをイエスさまのお名前によって、お祈りいたします。アーメン。

讃美歌:492「み神をたたえる心こそは」

説教「キリストの祝福」

佃 雅之

信濃町教会では、先週の日曜日、教会創立 100 周年を記念する礼拝が献げられました。教会には 150 名余りの人たちが集まりましたが、その中で一番小さな子は 1 歳、最高齢の方は 99 歳でした。集められた私たちの思いは唯一つ、神への感謝でありました。夫々が神への感謝の思いをもって、年齢も性別も一切の分け隔てなく人が集まるのが教会です。ゆえに、教会は、「神の家族」と言われます。旧約預言者のゼカリヤは教会の姿をこのように伝えていきます。

エルサレムの広場には高齢のために杖を使わなければ歩けないほどの年老いた男女が再び寄り集まり、この町の広場は、そこで遊ぶ少年少女で溢れるであろう。ゼカ 8:4

「エルサレムの広場」とは教会の始まりの場所です。教会は老人と若者が共に棲み、共に喜びを分かち合う所、ゼカリヤの預言の言葉は、「私たちが望む神の国、天の国の描写である」とも言われています。

今日の個所でキリストは、「私たちが天の国に入るにはどうしたらよいか」について語り掛けてくださいます。「イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た」と書かれています。当時のユダヤの社会では、尊敬する先生に子供の頭に手を置いて祝福を祈ってもらうという習慣がありました。偉大な教えを語り、奇蹟的な力によって病を癒すキリストの手によって祝福して頂くために、子供たちをキリストの前に連れて来たのです。

『マタイによる福音書』では、キリストが子供について語るのはこの個所で 2 箇所目です。今日の個所の少し前、18:3 で「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」とされています。キリストは、子供を「純粋で悪を行うことのない特別なものだ」と言っているわけではありません。神から見れば、子供も大人も全く変わりがないのです。「人間は神の似姿である」と聖書が語るのは、「小さな赤ちゃんの段階から既に、神の似姿である」と理解するべきです。私たち一人ひとりが、神の前では等しく唯一無二の存在であります。子どもは大人になる成長過程にあるものであって、大人と比べて成熟していない、心も体も劣った存在だと思っはならないのです。神が人間を、ご自分の似姿に造られた目的におかれては、子供も大人も全く変わる事のない神の愛の対象であります。

しかしこの時の弟子たちは、「神の定められた掟も秩序も知らない、いわばマナーも守れない子供は未完成で未熟なものだ」と考えていたようです。ですから弟子たちはキリストのもとに子供たちを連れて来た人を叱りつけました。キリストが弟子たちに向かって言われます。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げはならない。」子供の親を叱りつけた弟子たちが、反対にキリストに叱り付けられてしまいます。この時の弟子たちは自分たちが主の教えを静かに聴くことを喜びとしています。騒がしい子供をキリストから遠ざけて、大人たちだけで静かに、熱心にキリストの言葉を聴くことが主に喜ばれることだと思いをしていたのです。

あるいはこう考えた弟子がいたかもしれません。「キリストは忙しい、お疲れなのではないか、私たちが煩わしいことから守ってあげなければならない」ところがキリストは弟子たちの考えを真つ向から否定されます。キリストは常に、人間的な思いや人間の都合ではなく、神の御意思を成し遂げられるのです。私たちはどうでしょう。この時の弟子たちを愚かだと責めることが出来るのでしょうか。私たちは自分自身を顧みて、自分の行為や言葉によって子供たちをキリストから遠ざけてはいないでしょうか。「子供はじっとしていられない、騒ぐから集中して話が聞けなくなる」、あるいは、「話を聴いても分からないだろう」と言って子供たちが礼拝堂に入ることを拒むなら、私たちも弟子たちのよ

うにキリストに叱られることになるのではないのでしょうか。

私たち教会は、神さまから子供たちの成長を見守ることを任された者として、その自覚をもって子供たちと接し受け入れることが出来ているのでしょうか。キリストが14節で言われた「来させなさい」という言葉(ἀφίημι [行かせる、赦す、そのままにする] 命アオ能2複 ἄφετε)は、「本人がしたいようにさせなさい」という意味の言葉です。ゼカリヤの預言にあった通り、天の国は老人と若者が共に棲み、共に喜びを分かち合う所です。私たちは大人になると、何でも知っているような、自分の考えが正しいような態度をとることがあります。しかし、大人の都合を子供に押し付ける行為は、子供たちばかりでなく、結果、自分自身が天の国に入ることの妨げになるのです。私たちに求められていることは、子供たちと一緒にキリストの前に進み出ることでしょう。子供たちにイエスさまを救い主と信じて欲しい私たちは、何をすればいいのでしょうか。

教会では「種蒔き」という言葉がよく言われます。種を蒔いてくださるのはキリストです。キリストが蒔かれる種には確かな力があります。しかし、種が芽を出すためには、蒔かれた土壌が重要です。その土壌が種を育てることが出来るかが問われます。種がしっかり根を張れるように、私たちが良い土となることです。子供たちの心に蒔かれた種が根を張り、実を結ぶためには水を撒き、丁寧な手入れをすることが大切でしょう。私たちなら日々聖書に親しむ御言葉を噛みしめて生きている姿を見せることです。何時も神に感謝して、喜んで生きることです。常に祈り、神に自分の人生を委ねて生きているあなたの姿を通して、神に近づくことの大切さを子供たちの心に深く印象付けるのです。身近に目標に出来る憧れる大人がいることは子供たちの成長には大切な機会です。1歳の子から99歳の方まで同じ時間を共有し、同じ空間を共有し、同じ経験を共にすることが出来る教会はとても貴重な場所です。その場所で神さまを信じるとはどういうことか、自分の行いを通して見せることが私たちの務めです。そのためには、私たちが見つけている先にキリストがおられることに気付いてもらわなければなりません。大人も子供も一緒にキリストに向かって歩み出すことが出来れば、子供は共に信仰を歩む仲間になります。子供たちの未熟さや不完全さを審き遠ざけるのではなく、同伴者となる覚悟を一人ひとり持つことが大切です。愛情と労力と時間、つまり助けを必要とする子供を受け入れて、愛し育てることが教会という共同体の責任だということです。

キリストは、「天の国はこのような者たちのものである」と言われました。この言葉を私たちは注意深く聴かなければなりません。大切なことは「自分は無力である」という自覚です。子供は一人では生きていけないことを知っています。ですから安心して、信頼できる方と共に生きることが必要なのです。つまり、天の父を信頼し、共に生きたキリストに倣うことです。「天の国はこのような者たちのものである」、この言葉は子供のことだけを言っているのではないのです。「わたしのところに来る」全ての人に向けて語られている言葉です。今は子供であっても、誰もがいずれは成長し大人になる時が来ます。そして誰もが必ず老いて行きます。病に倒れることもあるかも知れませんが。私たち人間は誰もが一夜にして幼子のようになることがあるのです。神の祝福はいつも自分を低くする者に向けられています。

教会は弱い人が行く所と思っている人も少なくありません。教会を弱い人の集まりだと考える人は傲慢な人、無知な人、聖書を知らない人でしょう。しかし教会を知り、キリストと出逢ったとき、御言葉が傲慢で頑なな

心を砕き、神が真の知恵を与えてくださることが起こります。この世での困難や試練も神へと導くための力になり得るのです。私たちは教会でキリストと出逢って、自分の力ではどうすることもできないという経験をする中で、神を信頼する人生を歩み始めることが出来るのです。それが「子供のようにならなければ、天の国に入ることはできない(18:3)」ということであり、大切です。大切なことは、人間的な計算をしないことです。この世の常識や価値観にばかりに囚われるのではなく、信仰によって真の真実がなんであるかを求め続けることでしょう。それはつまり、キリストに接近することであり、それが主に祝福される幼子です。

キリストは神の国に幼子が来ることを求めておられます。この時、キリストが子供たちを祝福してくださったのは、子供だけを見ていたからではないでしょう。キリストは自分のもとに子供たちを連れて来た親の思いをも「善き事」とされています。小さな子供は一人で教会に来ることが出来ません。キリストの前に子供を連れてきて共に礼拝に与る、何より主が喜ばれるのはこのことです。キリストは子供たちに祝福を与えてくださいました。主なる神は、今日の私たち一人ひとりにも両手を置いて祝福してくださっています。主なる神が、私たちを愛してくださり、何時も傍にいて守ってくださいます。信仰というのは何時も私たちを愛し守ってくださいます神に信頼することです。教会という所は神に愛されていることへの信頼を生涯にわたって育んで行く所であり、

この朝、礼拝に招かれた私たちは、幼子のように御前に跪きたいと思えます。

お祈りを致します。

聖なる神。あなたの御子、私たちの主イエス・キリストによって、私たちがあなたの子とされている恵みを心より感謝致します。

私たち一人ひとりが次代を担う子供たちを育てる責任を自覚することが出来ますように。子供たちと共に成長することが出来る教会としてください。

この教会に集う子供たち、保護者の方々に、主に祝福される喜びを伝えることが出来ますように聖霊が導いてください。そのために私たちが御言葉を信じることの幸いに感謝し、喜んで生きる者でありますように。

私たちの救い主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:こどもさんびか 118(『21』544「イエスさまが教会を」)

献金

感謝の讃美歌:65-2「今ささげる」

感謝の祈り(別紙)・主の祈り

派遣:讃美歌 88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告:(特記事項なし)

後奏:「いと高きにあります神にのみ栄光あれ」(J.S. バッハ)